

# 国際結核肺疾患予防連合（ユニオン）

## ～第51回 肺の健康世界会議がオンラインで開催～

結核予防会

国際部 菅本 鉄広

2020年10月20日～24日、第51回肺の健康世界会議が開催された。同連合は世界の結核や肺疾患の予防に取り組む団体が加盟する国際組織である。創立100周年にあたる今年はスペインでの開催が予定されていたが、新型コロナウイルス感染症の影響で初めてのオンライン開催となった。会議では「予防の推進」をテーマに専門家による活発な議論が行われ、研究者、医療従事者、NGO、企業など約114ヶ国から5千名を超える参加者があった。

初日の開会式にあたり、結核予防会総裁の秋篠宮皇嗣妃殿下は、他のスピーカーに先立ち英語でビデオメッセージを寄せられた（本号表2参照）。議長を務めたユニオン会長のガイ・マークス教授は、「より先進的な予防と治療法で結核及び肺疾患による苦しみを終わらせることは、我々の使命だ」として参加者に結核終息に向けた取り組みを促した。WHOのテドロス事務局長は、新型コロナウイルスの世界的流行はある時点で終わっても、結核・タバコ・大気汚染・他の肺疾患は継続し、将来を再考しない限り、「毎年何百万人の人々の“息”と“命”を奪い続ける」とし、世界へ向けて連帯を求めた。また、ビル・クリントン元アメリカ大統領は、新型コロナウイルスの危機を将来の社会・経済・医療体制の在り方に私たちがどのように関わるかを再考する機会として捉えるべきと述べた。

会議では46のシンポジウム、41の口演発表、360のポスター発表、8つの専門家会議に加えて、同時開催されたTB Scienceでは8つのセッションが執り行われた。中でも新型コロナウイルスの問題は大きなテーマとして議論がなされた。新型コロナウイルスの世界的流行は既に結核及びHIV対策に対して大きな影響を与えており、世界的な予測では、3カ月の都市封鎖と10カ月の復興期間により、今後5年間でさらに630万人が結核に罹患し、さらに140万人が死亡する可能性があるとされている。その結果、結核との闘いにおいて少なくとも5年から8年の後退が生じるとの

ことである。「これまで以上に、HIVとTBのコミュニティが協力し、人々が必要とする社会経済のおよび人権保護に支えられ、より短い治療と予防レジメン及び、より良い感染管理への投資を呼びかける時」とUSAID副事務局長のシャノン・ヘイダー氏は訴えた。

興味深かった発表内容をいくつか述べたい。LTBI（潜在性結核感染症）治療に関して、これまでの方法はイソニアジドを6～9カ月間内服する方式がとられてきた。最近の治療レジメンの改善により、リファペンチンとイソニアジド週一回の服薬を3カ月間続ける方法が開発され、LTBI治療が容易になってきた。ちなみに、先の国連総会結核ハイレベル会合では、2018年から2022年までの5年間で「高まん延国を中心に少なくとも3,000万人が予防的治療を受けられるようにする」ことが宣言されているが、現時点での達成は2割程度に留まっており、目標達成に向けた今後一層の努力が必要である。また、薬剤耐性結核治療においても開発成果が出始めており、2020年6月に出版されたWHOの改訂ガイドラインでは、注射薬を含まないレジメンへの切り替えが勧奨されている。さらに超多剤耐性結核では新薬プレトマニドを用いたベダキリン、リネゾリドによる3剤併用療法（BPaL）をオペレーショナル研究として導入することが推奨されている。これにより、2年にも及んだ治療期間が6カ月と劇的に短縮される上に、必要な薬の数も大幅に抑えられ、3剤全て経口投与が可能となり患者は注射から解放される特徴がある。しかし、日本では未承認である。

結核患者発見をテーマとした発表内容も多かった。結核症の発病段階で、菌検査は陽性にもかかわらず結核に典型的な症状がない状態を無症候性結核症（Subclinical TB）と呼び、結核症と潜在性結核感染症の中間にあたる段階を指す。日本で広く実施されてきた胸部X線検査による健診は、この段階をいち早く発見する方策で、結核低減に努めてきた長い歴史がある。近年、小野崎（元WHO医務官・現結核予防会国

際部に勤務)らの貢献により、アジアやアフリカの諸国で結核有病率調査が実施され、その結果、WHOの従来の推定よりも実際は多くの患者が存在することが明らかとなった。また、調査で見つかった患者の約半数は無症候性結核症であることが分かり、この事は海外の専門家が結核の発病とは何かを再認識する機会となった。この取り残されている無症候性結核患者をいち早く発見するには、積極的的患者発見 (Active Case Finding) が重要となり、胸部X線検査や高感度の核酸増幅検査等を活用することで早期発見・早期治療が可能となる。例えば、最近ではフィリピンの結核対策でもこの方法を国策として採用している。過去、国内の結核患者を急速に減らすことに成功した日本は、途上国における結核罹患率減少に大きく貢献できると思われる。

今回、結核研究所から6演題が発表された。また、結核研究所がスポンサーとなり若手研究者向けの発表セッション (The Union student late-breaker session on lung health) が設けられた。国際協力・結核国際情報センターの山田が座長を務め、その中で6演題が発表された。結核診断におけるバイオマーカーの有用性評価からAIを用いた服薬管理技術の開発に関する研究、小児結核の簡易同定等、それぞれが興味深い内容であった。

#### 結核予防会発表一覧

日付	発表形式	演題名	発表者
10月22日	シンポジウム	How effective is the systemic integration of smoking cessation into tuberculosis control programme in creating smoke-free environments in Manila?	大角晃弘
	口演	Effect of COVID-19 on tuberculosis patient notification in Japan	内村和広
10月23日	シンポジウム	Bridge TB Care – the first step in bridging care and support for foreign-born persons with TB who are returning to countries of origin	河津里沙
10月24日	ポスター	A nation-wide survey of cross-border referral assistance (or lack thereof) for TB patients in Japan	河津里沙
10月21~24日	ポスター	Host immune factors related to non-multidrug resistant tuberculosis with treatment history in Vietnam	慶長直人 (土方美奈子)
10月21~24日	ポスター	Diagnostic accuracy of three urine lipoarabinomannan tuberculosis assays in HIV-negative outpatients	御手洗聡

結核研究所臨床・疫学部の内村は、新型コロナウイルス蔓延が日本での結核患者届出数に与えた影響を報告した。昨年の第一四半期に比べて、2020年では12%の新規結核患者報告数の減少が認められた。特に、接触者健診における新規患者発見では、昨年比べて57%も落ち込む結果となり、保健所職員におけるコロナ対応負荷の増大、結核患者接触者の受診控えが主な原因と示唆された。

24日の閉会式をもって学会は終了した。秋篠宮皇嗣妃殿下によるビデオを通じて、インド出身のソウミヤ・スワミナータン博士に対し「秩父宮妃記念結核予防功労賞世界賞」が授与された。

今回オンラインでの開催のため国際研修卒業生同窓会を設けることが出来なかったが、初のオンラインブースを出展することで結核予防会の事業や海外での支援活動を紹介することができた。また、毎年恒例のクリスマスシールコンテストでは結核予防会が1位入賞となった。

2030年までの結核終息目標達成まで残り10年となった。今一度、結核分野における更なる研究と対策が進むことを期待するとともに、日本は国際社会の一員として目標達成に向けたさらなる貢献が求められると考える。🐼